研究ノート

保育内容指導法「人間関係」の授業内容に関する考察
～「支援者」としての基本姿勢の形成に焦点をあてて～

今堀美樹[1)]

2022年1月11日受付　　2022年2月12日受理

Discussion of the Class Content of "Human Relations" in the Instructional Methods of Childcare Content
—Focusing on the Formation of Basic Attitudes as a Supporter—

Miki Imahori

キーワード：保育内容指導法「人間関係」，支援者，基本姿勢，教育実習

Ⅰ.研究の目的

これからの人生をどう生きるか．学生時代とは，この問いへの確かな答えを得ようとして試行錯誤をする時代である．学生達は就職活動という課題と向きあうが，職業を選択することは「生き方」を選択することでもある．この非常に重い課題と向きあい，時に挫折を経験しつつも，学生達は何とか進路を切り拓いて卒業していく．なかには大学に入学する前から，進路への方向を定めてきた者もいる．しかし，大学を卒業する直前になっても方向が定まらずに，就職した後も模索し続ける者もいる．これまで教員として多くの学生達と出会ってきたが，この課題に取り組んだ学生達の物語はじつに多種多様であった．

かくいう筆者は，高校3年生の頃に職業選択について考え，「子どもが好き」という気持ちこそ自分の才能であると，子どもと関わる仕事に方向を定めて進学した．そして学生時代の小学校への教育実習で，手をつないだ女児の瞳の輝きと出会い，人生が方向づけられたのである．筆者にとってこの出会いは，「子どもが好き」という自分の思いから，筆者を見上げて瞳を輝かせている女児の思いへと，関心の方向を転換させる体験となった．この，自分の内面から他者の内面への関心の方向の逆転は，「生き方」の逆転ともなった．

本研究の第一の目的は，筆者の「生き方」を逆転させた教育実習での体験を一つの事例として，「支援者」としての基本姿勢の形成を

大阪体育大学教育学部
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

1) 大阪体育大学　学生相談室・スポーツカウンセリングルーム

促す教育とはいかなるものかを考察することである．後に事例のなかで述べていくが，女児との「出会い」によって「生き方」が逆転したというのは，それまでの「支援される者」から，「支援する者」へと，自分の「生き方」が逆転したという意味である。そして「生き方」が逆転して「支援者」となるということは，他者との関係に入ろうとする「生き方」を選択することとなる．つまり，他者との関係に入ろうとする「生き方」を選択し，女児との関係で体験したような「出会い」を体験し続けるため，「支援者」としての基本姿勢の形成する努力を，生涯にわたって継続していくことである．

一方で，筆者が体験した「出会い」とは，ブーバー[1]（Buber,M.）が「我と汝」と表現した関係だと考える．ブーバーは，人はもう一つの主体，すなわち「汝」の前で初めて「我」という主体になる，と主張した．この「汝」なしに，「我」は本来の「我」として存在することができない．つまり，筆者は手をつないだ女児（汝）との「出会い」いよって，「我」という主体となり，他者との関係に入る「生き方」を体験し続けようとする主体性を内面に育て続けることができるようになった，と考えているのである．

本研究が対象とするのは，筆者が学生時代に経験した「出会い」によって進路を選択していく学習過程である．この学習過程を一つの事例として，理論的な枠組みに照合させて検討していく．用いる理論的枠組みは，ロジャーズ[2]（Rogers,C.R.）のカウンセリング理論を基盤に伊東博[3]らによって提唱された「教えない教育」という教育理論である．この「教えない教育」は拙稿[4]においても事例を検討する際に用いたが，本研究の事例検討においても有効であると考えている．

さらに，本研究の第二の目的は，筆者が経験した学習過程の検討を通して，「保育内容指導法（人間関係）」の授業の具体的な展開方法について考察することである．「出会い」によって支援者としての「生き方」が選択でき，支援者として真に生きることができる．そして支援者として真に生きようとすることによって，支援者としての「基本姿勢」が形成されていく．このような学習過程について，保育内容指導法「人間関係」の授業内容との関連で考察していく事が，本研究の第二の目的である．

Ⅱ．研究の方法

研究の方法は，事例研究である．検討の対象とするのは，筆者自身が小学校教諭と幼稚園教諭の養成課程在学中に経験した，小学校への2週間の教育実習の記録である．この，学生時代に経験した教育実習の記録を，「出会い」によって進路を選択していく学習過程の事例という視点から，理論的な枠組みに照合させて検討していく．加えて，「教えない教

育」の視点と照合させて検討することにより，「支援者」としての基本姿勢の形成には何が必要なのかを考察していく．それにより，「保育内容指導法（人間関係）」の授業内容に関する，具体的な展開方法の考察につなげていきたい．

Ⅲ．倫理的配慮

本研究が対象とする教育実習の記録は，およそ40年前に小学校への教育実習で，筆者が毎日の実習内容に対する反省評価を記した「実習のふり返り」という，実習日誌の一部である．この記録には，個人が特定できるような情報はほぼ含まれていない．しかし，倫理的配慮として個人が特定されるおそれがある情報については，文脈を損なわないよう配慮しつつ個人が特定されないための匿名加工をしている．

Ⅳ．研究の結果

1．研究の対象

研究の対象とするのは，筆者が小学校教諭と幼稚園教諭の普通二級免許取得を目指して短期大学在学中の二年目に体験した小学校への教育実習の事例である．具体的にはおよそ40年前に，筆者が「教育実習日誌」の「実習の振り返り」として作成した記録を研究の対象とする．教育実習の期間は二週間であり，「実習の振り返り」は以下のように12日分ある．

（1）実習の振り返り：1日目

待ちに待った実習の第1日目は，驚きの連続でした．“かわいい”という印象のみが強く頭にあった子ども達も，やはり一人の人間であり，ただ“かわいい”だけでは理解することも指導することもできないのだと痛感し，自分の考えの甘さを知ったような気がしました．自然にできていた笑顔が，いつの間にか意識しなければできないようになり，教育の難しさを垣間見たような思いがして，少々不安な心持ちになりました．予想通りの結果でした．

子どもたちはエネルギーのかたまりであり，そのエネルギーを学習に向けさせるのは至難の業でした．先生がいくらきつく注意されても，全然こたえていない様子で，かえってこちらの方がビクついてしまったようでした．私も何度か子どもたちに嫌な顔を見せました．それなりに反応はしてくれましたが，期待は外れっぱなしでした．今思うと，私は叱っていたのではなく，単に怒っていただけのような気がします．子ども達にしてみれば，「あの先生，一人で怒ってるわ」といった調子です．感情が激しく，すぐそれを表面に出してしまう私は，子ども達と同じ位置に立って行動していたのかもしれません．自分は教師であり，あくまでも子どもを指導する立場にあるのだという事を忘れていたようです．

子ども達は，それぞれ悪い面を持ってはい

るが，それに負けないくらいの良い面も持っているはずです．子ども達の良い面を認め，それをのばせる教師になりたいと思います．悪い面だけをいくら指摘したところで，進歩など期待する方が無理なのかもしれません．教師になるにあたっての最大の疑問である「はたして私は，すべての子どもを等しく愛することが出来るだろうか」という問いに対し，少しでも希望が持てるように頑張りたいと思います．

（2）実習の振り返り：2日目

風疹で二人も児童が休んでいました．今，風疹がとても流行っているので，皆気を付けてほしいです．一人でも休んでいる子がいると，とても残念な寂しい気持ちになります．

人形劇「まぬけな王大（ワンタ）と石の獅子」を観ました．二時間続けて観ましたが，静かに観ることができていました．観終わってから「全然おもしろなかったわ」などと言っている子もいましたが，きっと胸をドキドキさせて観ていたに違いありません．かく言う私も，あの石の獅子の鳴き声には，どきどきさせられましたから．後で感想文を書きましたが，皆とてもしっかり書いているので感心しました．

理科の時間は，運動場に出て虫探しをしました．都会の真ん中に虫などいるのかしらと思いましたが，結構いるものです．虫のことになると，男の子達は急にいきいきしてきます．本当に虫が好きなんだなあと思いました．色々な虫や，虫の生活に触れることによって，生命の大切さも学び取れたらと思います．音楽の時間は，30分ほどしてから先生が来られたので，その間実習生二人で児童達に歌やハーモニカの指導をしました．ハーモニカがとても上手に吹けるのには感心しました．しかし，歌はちゃんと歌ってくれるのですが，歌と歌のつなぎめになると，口々に騒ぎ出して困りました．指導していく上では，このつなぎめをどうするかが，とても難しくなるのだなと思いました．

休み時間の過ごし方ですが，いつも一緒に遊ぶ児童が決まっていて，まだ一言も言葉を交わしていない児童がいます．何とかしてそんな児童とも交わりたいと思います．給食，掃除など，自分としてはお手伝いしているつもりですが，かえって邪魔をしているような，そして先生が苦心してお作りになった規律を乱してしまっているような気がして，とても心苦しく思っています．なるべく邪魔にならないよう，気を付けてやって行きたいと思います．

（3）実習の振り返り：3日目

実習が始まって早くも三日が過ぎました．ようやく子ども達の名前も覚え，毎日学校に来るのが嬉しくてなりません．でもなかには，なかなか私に懐いてくれない子どももいて，どうしたら良いのかと思案中です．授業中の

巡回や，給食を一緒に食べるなどして，2年5組の児童全員ととけ込めるようになりたいと思います．

今日の体育は合同体育でしたが，ここでは2年5組の元気良さが際立っていました．この元気はどこから来るのか，不思議です．でも，本当にやる気を出したら見違えるように立派になります．今日の「社会」は，本当に素晴らしい授業でした．どうしたらこんな授業ができるのかしらと考えましたが，やはりそれだけの準備と経験が必要なのだなと気付きました．この前の「社会」の授業でしていたことは，この授業のためにもなっていたんだなと気付きました．

金曜日に練習授業をしたいと思っていますので，少々緊張気味です．はたして，授業らしい授業ができるかどうか，，，．テストの丸付けをしていて思ったのですが，皆わんぱくですが，勉強も良くできるようです．だから，そのエネルギーを勉強に向けたらどんなに伸びるだろうと，楽しみでなりません．どうにかして，皆の気持ちを引っ張っていけるような授業がしたいのですが，とても難しいことですね．

（4）実習の振り返り：4日目

雨のため，児童は教室の中で遊んでいました．いつも外へ児童に連れていかれる私は，この機会にいつも教室に残っている児童と話をしようと思いました．おとなしい児童は，遊んでいる時もおとなしく，あまり話をしてくれません．でも，ようやく時々私の方を見てくれるようになり，微笑みかけると，微笑み返してくれるので，とても嬉しく思いました．私も小学校の頃は引っ込み思案でとてもおとなしい子どもだったので，おとなしい児童の気持ちは良くわかると思っていたのですが，そう簡単にはいかないものです．

このクラスの児童は良いことは良い，悪いことは悪い，という区別がちゃんとできているようです．喧嘩をしても，悪いと思った方が謝ると，もう一方はすぐに許して仲直りができるのです．あれほど素直に行動できるものかしらと，羨ましく思います．心がまだ汚れていないのでしょう．いつまでも純粋な心でいてほしいと思います．

「1時間中ずっと難しい授業をするのは無理です．あるポイントだけ押さえて，後は児童の好きなようにさせることです」という先生のお話は，本当になるほどと思いました．授業を見ていても，何だか遊んでいるように見え，それなのにテストの成績が良いというのも，こういった原因からなのでしょう．そんな授業をするには，心の広さや冷静さと，そしてテクニックが必要なのですね．私はこのどれもがまだ身についていませんので，授業らしい授業ができるか不安です．テクニックはまだまだ無理だと思いますので，感情を抑え，なるべく冷静になれるよう，努力したいと思います．

（5）実習の振り返り：5日目

生まれて初めて授業をしました．やっぱりまだまだ勉強が足りないと思い，ガックリしました．小学校の教材，特に低学年は，どういう風に何を教えたら良いのか，読んでいるだけでは全然わからず，指導書を読んでも一向に焦点が決まらないので，授業も悩みながらしたような状態でした．これでは児童達に理解させようという方が無理な話です．それにもかかわらず，児童達は一生懸命聞いてくれるので，なんだか悪いことをしているみたいで「ごめんなさい」と謝りたいような気持になりました．教師とは，本当に責任の重い仕事なんだなあと，改めて思いました．もっと努力をして行かなければならないですね．

同和教育と障害児教育についての研修を受けました．とても積極的に取り組んでおられるので，感動しました．本校のような学校が増えていったら，社会はどんどん良くなっていくことでしょう．大学でこの二つの問題について学んでいますが，とても難しいので，このような研修をして下さって，とても感謝しています．

実習が始まって，もう一週間近くなりました．最初の三日間ほどは緊張も加わって，神経がキリキリしていましたが，最近は大分慣れてきたようです．でもそれと共に，何だか毎日を無駄に過ごしているような気もします．そろそろ気を引き締めて，もう一度初心に戻り，どん欲に色々なものを吸収していくよう，頑張らなければならないですね．

（6）実習の振り返り：6日目

保健室に行って，保健室の先生とお話をする機会を得ました．この学級には，てんかんの発作を起こすおそれのある児童がいます．ご両親は，発作をおそれてついつい甘やかし気味にお育てになり，少し甘えん坊の女の子になってしまったそうです．

実を言うと，私もその児童には他の児童より甘くしていたように思います．必要以上に気を配ることは甘やかすことになります．重要なのは，気の配り方でしょう．児童に厳しくするには，何より自分自身に厳しくしなければいけません．甘やかしたいという欲求に勝たなければいけないからです．短い期間ですが，気を付けていきたいと思います．

図書館へ行って本を読みました．皆，自分の好きな本を持ってきて読むので，どんな本を読んでいるかを見ると，その子の好みがわかります．絵本に描かれている絵を見ながらお話を自分で考えている子や，勉強の本を読む子など様々です．普段の授業では気付かない面が見いだせて，とても勉強になりました．子どもは，自分の様々な面を知ってもらえると，とても喜びます．子どもをよく知る機会を逃さないようにしようと思いました．

地区別児童会とはいったい何なのだろうかと思いましたが，地域的結合を深め，縦のつ

ながりを強めるための活動だったようです．このような活動をすると，学校だけでなく，家に帰ってもたくさんの友達と遊ぶことができ，それによって父兄の方たちのおつきあいも生まれてくる事でしょう．先輩のお兄さんお姉さん達，そして後輩の弟や妹ができ，人間関係がより豊かになり，いたわりの心や目上の人を敬う態度等も学ぶことができると思います．このような活動を大切にされているのを見て，本当に感心させられました．

（7）実習の振り返り：7日目

今日は授業参観で，ほとんどの児童のご父兄が参観にいらっしゃいました．少し緊張気味で，お父さんやお母さんに良いところを見せようと，皆一所懸命に頑張っていました．授業参観は，児童のお父さんやお母さんに授業を見てもらうためのものですが，同時に教師側が，児童とご父兄の関係を見る良い機会であるとも思います．こわい顔をして子どもを見ているお母さんや，ニコニコ笑いながら見ているお母さんと，様々です．ご父兄が来ていらっしゃらない児童への配慮も忘れてはならないと思いました．

「学習について」の研修を受けました．“教師にとって一番重要な仕事は授業である”というお言葉をいただきました．でも，納得のいく授業をするためには，「学級の児童のしつけ，雰囲気作り」が必要です．また，子ども達一人ひとりを理解してやることも必要でしょう．教師には様々な仕事があるが，その最終段階として，目標の最も高いところに授業があるのだと思います．

“教師と乞食は三日やったらやめられない”とは，よく言われたものだと思いました．子どものかわいさを知ったら，もう子ども達と離れて暮らしてはいけません．どうしてこんなに子どもがかわいく思うのかを考えてみました．そしてその理由が，「子ども達は私を必要としてくれている」という事によるのだと気付いたのです．私はこれまで，他人に自分を理解してくれることや，高い知識や経験から生まれるものを与えられることを求めてきました．そして，その欲望が満たされない欲求不満をも感じてきたのです．それが今回，この実習で全く反対の立場に立ってみると，信じられないほどの充足感に満たされた時を感じたのです．もちろん，自分の力の無さから子ども達に何もしてやれない辛さを感じることもあります．でも，自分の努力で解決できると思ったら，辛さも半減します．

（8）実習の振り返り：8日目

養護学級実習がありました．期待と不安をもって臨みましたが，終わっての感想は，どんな障害を持っていようとも，皆同じ子どもなんだという事です．研修の時のお話し通り，ただ個性が他の子どもより強いというだけで，その個性をどれだけ理解してやるかが重要だと思いました．この“理解する”という事につ

いてですが，実習をする前に子ども達の名前と，その子ども達が今どんな状態にあるのかという事を，知らせていただきたかったと思います．教室の中に入り，障害を持つ子ども達を前にして，私は一体何をすれば良いのか全然わからなかったのです．先入観を持つと，余計にわからなくなってしまうおそれがあると考えてのことと思います．しかしできれば，もっと子ども達のことをよく知ってから，実習に臨みたかったと思います．それにしても，養護学級の先生のお姿には感心させられました．どんなことがあろうとも，顔色一つ変えず対処していらっしゃいました．子どもを本当によく理解し，心をつかんでいらっしゃるように思いました．きっと大変な努力をされているのだと思います．

今日，二時間目の授業を担当しました．音楽は，科目としては好きな方なのですが，授業となると勝手が違います．ピアノ伴奏を一所懸命練習したのに，あがってしまい全く思うように弾けませんでした．教材を作っていたら，もっとスムーズに行っただろうと思うと残念でなりません．打楽器を使ったのですが，子ども達がとても触りたがって，必要じゃないときに鳴らしたりするので，これもまた授業の妨げになりました．「子どもを指導する立場にあるのに，逆に子どもに利用されたようだ」との先生のお言葉に，ますます自分の未熟さを知ったような次第です．

（9）実習の振り返り：9日目

社会の授業を担当しました．先生が授業をされているのを見ると，何とも簡単にされているように見えるのですが，やはり予想通り，とてもしんどい授業でした．新しいところに入り，子どもが良く知らない「洋品店」のことについて，子どもから知識を引き出すのですが，なかなか発表してくれません．少し板書をしたのでノートを出させると，板書を写すのではなく人形の絵を描いて遊んでいる子もいました．子どもに興味をおこさせ，意識を集中させるという事は，本当に難しい事なんだなと思います．

子どもから頼まれて本を持って行きました．『赤い鳥』に掲載された「金魚うり」という物語を読んだのですが，その感想を聞いて考えさせられました．この物語は，金魚うりのおじさんが，弱った金魚を他の金魚と別にして，弱ったからといって馬鹿にされないようにしたところ，やさしい男の子が，その弱った金魚をかわいそうだからいたわって大切に育ててやろうと買って行ったというものです．人間の世界にも，困っている人やかわいそうな人に対し，憐みの心ややさしい親切心を持たず，逆にいじめるような人がいるが，これは絶対に良くないことで，困った人には他の人よりうんとやさしくしてあげなければならないのだ，という道徳を教える物語であると思います．ところが，5人ほどの女の子に聞い

てみたところ，3人は困った人を見たらやさしくしてあげる，と言うのですが，後の2人はやさしくなんかしてあげない，と言うのです．どうしてと聞いてみたところ「そんなこと無駄なことやし，第一時間がもったいないわ」というようなことを言いました．よりひどい事には，ある1人の子は「私，塾に行ってるもん」ときたのです．小学校2年生は，魂が純粋でけがれを知らず，自分の損得でものを考えない年頃だろうと思っていた私は，予想外の返事が返ってきてびっくりしました．どう指導して行けば良いのか，とても難しいです．

(10) 実習の振り返り：10日目

算数の授業をしました．なかなか皆の気持ちを引き付けられず困りました．教材を使い指名して黒板に書かせたりすると，我も我もと手をあげてくれました．わかっているかどうか不安な子をあてていったのですが，それによって問題が二つほど持ち上がりました．

一つ目は，よくできる子が欲求不満になってしまうという事です．わかっていそうな子はあてなかったので，後で「どうしてあててくれなかったの？」と言われました．ああ，これは失敗だったかなと思いました．できる子もできない子も両方が満足してよく分かる授業をするにはどうすれば良いか，考えなければいけないと思います．

二つ目は，問題をまちがった女の子がいて，その子に手助けをしてくれるように男の子をあてましたが，その後その男の子が他の男の子に「好き好きどうし」などと言ってからかわれ，喧嘩になってしまったことです．困っている友達がいたら助けてあげたいと思うのは当たり前のことのようで，とても難しいことです．それが，男の子が女の子を助けるとなると，なかなかできるものではありません．でも，この難しいことが当たり前のことのようにできる子になってほしいと思います．

実習も残り後わずかになりましたが，自分にもっと出来ることは無かったかと後悔ばかりが心に湧いてきます．実習生の仲間達や子ども達，諸先生方を見ていて，この間色々考えましたが，やはり私は私にしかなれない教師になろうと思いました．ただ，自分にだけは厳しくして．

(11) 実習の振り返り：11日目

実習生仲間の研究授業を見せていただきました．私も音楽の授業をしましたが，やっぱり全然違うなあというのが実感です．何といっても子ども達が本当に静かに授業に取り組んでいるのにはびっくりしました．音楽の授業といえば，子ども達がうかれさわいで当然だと思っていましたが，やはりよい授業をするには，まず子どもの姿勢が学習しようとするものでなければならないのかもしれません．授業の研究も十分にされていて，自分の研究の足りなさを改めて知ったような次第です．

子どもの意識を集中させるのも上手いなあと感心ばかりさせられました.

次の時間に，音楽の授業をしました．担任の先生がいらっしゃらないので，子ども達が騒いで困りました.「先生はもう明日でみんなとさよならするのよ．もう少し静かにしようとは思わないんですか」なんて言うと，何秒間かは静かになるのですが，1分ももちません．授業がなかなか進まず，結局リズム打ちの中に鈴を入れた段階で終わりました．合奏をしたかったので，少々心残りです.

(12) 実習の振り返り：12日目

子ども達とお別れ会をしました．お別れ会では，泣いてしまうのではないかしらと，とても心配していたのですが，泣くどころか，怒りっぱなしでした．お別れ会の間くらい静かにしてくれるだろうと期待していたのですが，その期待は儚くも裏切られ，もうガックリときました．でも，2年生の子ども達に別れの悲しみを味わうことを要求することが，無理なことなのでしょう.「先生，また遊びに来てね．バイバイ」と言う子ども達の言葉に，何だか私まで全然“別れる”という実感が失われ，またちょくちょく会いに来るわというような，さっぱりとした気持ちでお別れができました.

先生，2週間本当にありがとうございました．先生が心の大きな方なので，私は本当に救われました．おかげさまで，無事に実習が終えられました．技術的な面や経験的な面では，私はこの実習を成功させられたとは思いません．けれど，精神的な面で，とても成長させていただいたと思っております．私は何かと考え込む性格で，一つの問題を解決するのに相当の時間がかかります．今回の実習では，人生の中で最も大きな問題である，いかにして自分は生きていくべきかを知ることができました．実習を体験して，初めて自分の生きる道が決定したのです．これは，私にとって本当に大きな収穫です．一生，“自分はいかにして生きるべきか”と悩みながら生きていく怖れの大きかった私には，もうそれだけでこの実習は満足のいくものであり，大成功だったと思えるのです．のびのびと自由に実習をさせていただき，きっとご迷惑をおかけしたことと思いますが，心から感謝しております．本当にありがとうございました.

2．理論的な枠組み

(1)「教えない教育」とは何か

筆者が学生時代に経験した教育実習の記録を,「出会い」によって進路を選択していく学習過程の事例という視点から，理論的な枠組みに照合させて考察していく．用いるのは，ロジャーズのカウンセリング理論を基盤に提唱された「教えない教育」という教育理論である．これは，カウンセリングの基本的な観点を教育に適用したもので,「子どもは教育の客体なのではなくて主体なのである」[5] とい

う視点に立つ．そして，教育という営みに付随してくる様々な社会的要求ではなく，あくまで教育の対象となる人びとに主要かつ直接的な関心を向ける．それは人間中心の教育を提言するが，その具体化において重要なのは思考と感情の統合であると主張する．心のうちにある学びへの知的関心と，学びたいという感情の動きが統合してこそ，主体的な学習過程が生まれると主張するのである．

筆者はこうした“教えない教育”の主張が，本研究における教育実習の記録検討において有効だと考える．なぜなら，教育実習は単なる知識の獲得を目的とはしないからだ．実習現場で出会う子ども達を理解し，より良い授業を行うため，獲得した知識を体験に関連づけつつ思考を深めていく．また思考を深めていく際には，自分の内面にある感情の動きにも気付いていることが必要となる．自己の感情の取り扱いは，教育において極めて重要だからだ．自分の内面にある感情に気付き，それを授業や子どもへの働きかけに活用できてこそ，子ども達の心に働きかける教育活動が可能になると筆者は考える．

（2）“教えない教育”の基本原理

では，事例の検討に用いる“教えない教育”の基本原理について，中野[6]に従って以下にその要点を紹介しておこう．

1）「学習」についての基本的観点

学習についての基本的観点として，教師は主体的な学習活動に添って学習環境を整えるが，問題や課題は学習者自身が自ら発見して追求していけるよう援助することが必要である．

2）「学習」の原動力

学習の原動力となるのは，学習の場における経験である．人間は，成功した経験が重なれば自分に自信をもつようになり，自主的かつ積極的に行動するようになる．しかし失敗を繰り返せば自信を失い，消極的かつ依存的となる．経験から獲得される能動的な力を学習の原動力として大切にし，学習者が自主的で個性的な存在になるよう働きかけることが重要である．

3）「学習」は生活全体のなかで

学習は生活から切り離されたものではなく，生活のなかにあり，生活そのものに影響を与えるものである．そのため学習に対する援助は，学習者の生活全体にひろがりをもたらす援助とならなければならない．授業中の学習行動に対しても，学習者の生活全体に目を向けて，それとの関連で授業中の行動を考えていかなければならない．そのためには，教師と学習者たちとの間に安定した人間関係が存続し，教師は学習者たちの全体像を理解して

いくことが前提として必要となる．

4）教師のリーダーシップ

教師自身が，学習者の発言を辛抱強く聞くことが重要である．そのためには，発言の中に表明され切ってはいない，その発言の背景にある内面の思考や感情の流れに着目することが重要である．それにより，学習者の真の主張をひき出すことができる．また，語りかけ方を簡潔で率直で明快なものとなるように工夫するなどの，コミュニケーションの際の教師自身のあり方を改善していくことも重要となる．

3．理論的枠組みを用いた実習記録の検討

（1）学習に向かう主体性の検討

上記した，「学習」についての基本的観点は，「教えない教育」の基本的な教育の方向性を示している．主体的な学習活動に添って学習環境を整えるが，問題や課題は学習者自身が自ら発見し追求していくよう援助する．つまり，教師は環境整備はしても「教えない」のである．こうした観点から実習記録を順に検討していくと，子どもとの「出会い」によって問題や課題を発見しそれを追求する主体的な学習が導かれていることがわかった．こうした，「出会い」によって導かれた学習とは，次のようなものであった．

1）一人の人間としての子どもとの「出会い」

「待ちに待った実習」という書き出しの言葉が，筆者が教育実習の始まりを待ち焦がれていたことをあらわしている．しかしそれは，子ども達への“かわいい”という印象をまるで空想を膨らませるかのように心の内に育てていたからだ．しかし，子どもはそれぞれ一人の個別性を持つ人間である．実習初日から，“かわいい”という印象では収まらない一人の人間としての子どもと出会い，不安な心持ちになっている．そして，「はたして私は，すべての子どもを等しく愛することが出来るだろうか」という問いを改めて自分に問うてもいる．

実習を待ち焦がれていた時期，心の内に育てていた子どもの姿は，現実の子どもの姿に「出会う」前の単なるイメージであった．学生が実習で子ども達と出会う時，それに先立つ内面の思いを抱いているものと考えられる．しかし，それがいかに自分にとって重要な思いであっても，その思いは「出会い」によって打ち砕かれる運命にある．そして実習生には，打ち砕かれた自分の思いよりも目の前に存在する一人の人間としての子どもに深い関心を向けることが求められるのである．現実の世界に生きている一人の人間である子どもと出会い，内面に保持してきた思いを再構築していくことが，実習で最初に向き合う重要な課題となる．そしてこの課題は，誰からも教わることのできない，実習生自身が主体的

に取り組まなければならない課題である．

2）働きかけが必要な子どもとの「出会い」

実習生は子ども達にとって，若さあふれる魅力的な存在である．そのため，休み時間は一緒に遊びたいと多くの子ども達が集まってくる．しかし，なかには自分の気持ちを表現することの苦手な子どももいる．まだ一言も言葉を交わしていない子どもに，授業中の巡回や，給食を一緒に食べるなどの働きかけを始めたが，なかなか上手くいかなかったと記録には書かれている．そうしたなか，たまたま雨になった実習四日目に，いつも教室に残っている児童と話をしようと試みられる．そして，あまり話をしてくれなかったものの，微笑み返してくれたことをとても嬉しく思った，と記録にある．自分が小学校の頃に引っ込み思案だったので，おとなしい児童の気持ちは良くわかると思っていたが，そう簡単にはいかない．子どもは一人ひとり，全く違う存在だからだ．そして図書館へ行って本を読む機会には，子ども達が読んでいる本を見て好みを知ろうとするなど，普段の授業では気付かない面を見出そうと努めている．こうした取り組みを通して，「子どもは，自分の様々な面を知ってもらえると，とても喜びます．子どもをよく知る機会を逃さないようにしようと思いました」という洞察に至っている．

以上のように検討していくなかで確認できるのは，次のような点である．まず第一に，働きかけの必要な子どもに実習初期から目を向けて，様々な働きかけの工夫をしているが，それは「問題や課題を学習者自身が自ら発見し追求していく」ために必要な問題意識をもって，実習に臨んでいたからだと考えられる点である．問題意識の一つが，実習一日目の記録にある「はたして私は，すべての子どもを等しく愛することが出来るだろうか」という自分自身への問いである．そして第二に，学習者が内面に抱いている問題意識を自由に追求できるような学習環境が，教育実習では整えられていたという点である．こうした学習環境として最も重要なのは，実習担当教員との信頼関係である．これについては，「教師のリーダーシップ」について検討する際に詳しく述べたい．

3）かけがえのない子どもとの「出会い」

実習七日目の授業に関する研修に対し，納得のいく授業をする前提は子ども達一人ひとりを理解することだとして，授業は最終段階の目標だという見解を述べている．そして，子どもを理解することに関連して，「子どものかわいさを知ったら，もう子ども達と離れて暮らしてはいけない」という，自分の内側から湧いてくる思いを語っている．さらに，どうして子どもをかわいく思うのかと考えて，それは「子ども達は私を必要としてくれている」からだとして，次のように述べている．

「私はこれまで，他人に自分を理解してくれ

ることや，高い知識や経験から生まれるものを与えられることを求めてきました．そして，その欲望が満たされない欲求不満をも感じてきたのです．それが今回，この実習で全く反対の立場に立ってみると，信じられないほどの充足感に満たされた時を感じたのです」.

教育実習では，自分の心のうちに育ててきた子どもへの“イメージ”が打ち砕かれ，“現実”の子どもと向き合い，子どもへの理解を再構築することが求められた．しかし，子どもへの理解を再構築する課題は，思わぬ方向に展開した．それは，「私を必要としてくれている」かけがえのない子どもとの「出会い」の体験であり，「全く反対の立場」に立つことによる「信じられないほどの充足感」の獲得であった．他者に支援を求める立場から，他者を支援する立場に転換することで得られた充足感とは，他者との関係に入ろうとする「生き方」が持つ力である．「支援者」としての基本姿勢の形成には，学習に向かう主体性が求められるが，他者との関係に入ろうとする「生き方」そのものに主体性を育てる力があると筆者は考える．

（2）「学習」に向かう原動力の検討

このように，学習過程における体験が学習の原動力となっていくとは言え，ことごとく失敗を繰り返していることが，筆者の記録からはうかがえる．しかし，失敗を繰り返しつつも粘り強く実習と向きあえている．はたして，この粘り強さはどこから生まれてくるのか．記録の検討から筆者が見出したのは，対象となる子どもと学習者である自分とを，肯定的にとらえる力であった．この力について，順に見ていこう．

1）子どもと自分の双方を肯定的にとらえる力

「子どもたちはエネルギーのかたまりであり，そのエネルギーを学習に向けさせるのは至難の業でした」．実習初日の記録に書かれたこの一文は，その後も授業の反省評価に何度も登場する一文である．最初から最後まで，子ども達のエネルギーに振り回されて実習を終えたという事は，次のような文章からもうかがえる．

「私は叱っていたのではなく，単に怒っていただけのような気がします」.

「感情が激しく，すぐそれを表面に出してしまう私は，子ども達と同じ位置に立って行動していたのかもしれません」.

「歌と歌のつなぎめになると，口々に騒ぎ出して困りました．指導していく上では，このつなぎめをどうするかが，とても難しくなるのだなと思いました」.

以上のように，子ども達のエネルギーを学習に向けさせることができないという反省文が毎日のように記されているのである．

しかし興味深いのは，子ども達のエネルギーに振り回されてはいても，子ども達に気持ち

を伝えることができている点である．たとえば，担任の先生がいらっしゃらないなか急遽担当した音楽の授業で，騒ぎ続ける子ども達に「先生はもう明日でみんなとさよならするのよ．もう少し静かにしようとは思わないんですか」と言っている．そうすると，数秒間ではあるものの，子ども達は静かにしてくれたというのだ．授業の進行には失敗しているが，子ども達とのコミュニケーションは何とか成立していることがわかる．子ども達に果敢に働きかける実習生と，それに応答するものの自分たちのペースを崩さない子ども達．この関係からは，子ども達と実習生の双方が，相手と自分の双方を肯定的にとらえていることがわかる．お互いを肯定的にとらえることのできる関係が，失敗を繰り返しつつも学習を継続させるエネルギー源になっていたものと考えられる．

2）自分の成長を見出す力

授業を担当するたびに反省の言葉を書き続け，実習を総括する際には「技術的な面や経験的な面では，私はこの実習を成功させられたとは思いません」と述べている．しかし「精神的な面で，とても成長させていただいたと思っております」というように，自分の成長を見出すこともできている．そして，それがいかなる成長であったのか，次のように述べている．

「人生の中で最も大きな問題である，いかにして自分は生きていくべきかを知ることができました．実習を体験して，初めて自分の生きる道が決定したのです．これは，私にとって本当に大きな収穫です」．

この，自分の生きる道を決定させた体験こそ，手をつないだ女児の瞳の輝きとの「出会い」であった．手をつないでいる女児が，筆者の手を大事そうに見つめ嬉しそうに目をあげた，その瞳の輝きは今も脳裏に焼き付いている．自分にとって自分とは，何の取り柄もないみじめな存在だが，この女児にとっての自分は瞳を輝かせて見つめる大事な存在なのだと気付いた．そして，その瞳をさらに輝かせるために生きていくことが，自分の生きる道だと決意したのである．

この出会いは，「子どもが好き」という自分の内面にある思いから，他者の内面にある思いへと関心の方向を転換させる意味を持った．それは，「生き方」を転換させる出会いとなったのである．自分の成長を見出す力は，ほんの一瞬の「出会い」によって与えられた．人はもう一つの主体，すなわち，「汝」の前で初めて「我」という主体になる，というブーバーの主張に深く共感するのは，筆者がこのような「出会い」を経験したからだ．「汝」なしに「我」は本来の「我」として存在することができない．教育実習でこのような「出会い」を得たことは，筆者にとって全くの幸運であった．しかし，幸運を引き寄せる原動力は，自分の成長を見出す力であったと考えている．

（3）生活に根付いた「学習」の検討

学習に対する援助は，学習者の生活全体にひろがりをもたらす援助とならなければならない．では「教えない教育」がいう，「生活全体に広がりをもたらす学習」とは一体何なのか．筆者はこれを，社会に対する問題意識を養うことだと考える．子どもを支援しようとする時，その子どもと家族，そしてその背後にある社会を見つめる視点が必要となる．とりわけ，子どもの育ちを阻害する社会問題への視点は，教育現場において重要である．筆者の記録からは，教育実習において社会問題への視点を養う機会が，プログラムとして組み込まれていることが確認できる．

実習5日目：同和教育と障害児教育についての研修

実習6日目：保健室に行って，保健室の先生とお話をする機会
地区別児童会という地域的結合を深め，縦のつながりを強めるための活動を学ぶ機会．

実習8日目：養護学級（今日の特別支援学級）の実習

これら，社会に対する問題意識は，一人の人間として社会生活を営む中で養われるものだ．子どもの頃からの社会生活の中で培ってきた問題意識を，「支援者」としての基本姿勢の土台にしていく作業を，生活の中で積み重ねていかなければならない．教育実習のプログラムにこれらの研修が実施されているのも，こうした積み重ねを実習生に求めているからに他ならない．大学での学びと関連付けて，子ども達を理解し，子ども達に働きかけるために必要な，社会に対する問題意識をどう深めていくのか．「支援者」としての基本姿勢の形成には，こうした生活に根付いた「学習」が不可欠なのである．

（4）教師のリーダーシップとは何か

これまで述べてきたような学習を促進する教師のリーダーシップとは，いかなるものであろうか．これについて，実習の記録に直接的な表現で書かれているのは，実習最終日の以下のような文章のみである．

「先生，2週間本当にありがとうございました．先生が心の大きな方なので，私は本当に救われました．おかげさまで，無事に実習が終えられました．—中略—実習を体験して，初めて自分の生きる道が決定したのです．これは，私にとって本当に大きな収穫です．一生，“自分はいかにして生きるべきか”と悩みながら生きていく怖れの大きかった私には，もうそれだけでこの実習は満足のいくものであり，大成功だったと思えるのです．のびのびと自由に実習をさせていただき，きっとご迷惑をおかけしたことと思いますが，心から感謝しております．本当にありがとうございました」．

担当して下さった先生のコメントを書き出

すことは出来ないものの，実習生としての感謝の言葉には，担当教師の指導がいかに実習生の主体性を尊重したものであったかがうかがえる．筆者自身，久しぶりにこの記録を読み直して最初に気になったのは，敬体表現で書かれた手紙のような文体だということだ．筆者が学生に実習日誌の書き方として指導してきた，「5Ｗ1Ｈ（何時，何処で，誰が，何を，何故，どのように)」の要素を意識した客観的で読む人にわかりやすい記録文体とはいえない．しかし，むしろそれによって，実習生の内面でどのような学びや気持ちの動きがあったのかが分かりやすい記録となっている．この記録の書き方を指導された担当教師の，実習生の自由な学びと自己開示を促す指導が，記録の文体からうかがい知ることができる．

そして，まるで心の内を打ちあける手紙のような文章は，担当教師への信頼によるものだと考えられる．率直に自分の内面を語ると共に，疑問点についても臆することなく書いている．担当教師が，実習生を辛抱強く指導し，真の主張を記録に表現できるよう働きかけた賜物であろう．

Ⅳ．考察

ここまで，筆者が学生時代に経験した教育実習の記録を「教えない教育」という理論的枠組みによって検討してきた．支援者としての「生き方」を「出会い」によって選択していくという学習過程を促進していく要素が，一定程度は明らかに出来たと考える．では，これら学生の学習過程を促進していく要素を，実習前後の授業でどの程度準備していくことができるのか，保育内容指導法「人間関係」の授業内容との関連で考察していきたい．

「保育内容指導法（人間関係)」とは，日々の保育のなかで幼児の人間関係に働きかける方法を学ぶ授業である．そのため，幼児の具体的な姿に触れる実習をまだ体験していない段階で，学生達に保育を構想することを求める点に難しさがある．しかし，幼児の具体的な姿は目の前にないものの，共に学ぶ仲間達の姿や，幼児期を経て今に至る自分の姿と対峙することは可能である．筆者は，「保育内容指導法（人間関係)」について学ぶ際に重要なのは，共に学ぶ仲間達や自分自身と対峙することだと考える．つまり，目の前にいる人と対峙して，その人を理解し人間関係を深めようとする基本姿勢こそ，授業における一貫した目標でなければならないと考えるのだ．なぜなら，こうした基本姿勢は幼児か成人かに関わりなく他者を支援する者全てに求められると考えるからだ．そして，幼児の発達にあわせて主体的・対話的に関わるような保育を構想する力は，仲間達との主体的・対話的な人間関係を構築していく過程で培われると考える．それゆえ課題となるのは，授業に参加している学生達のこうした学びに向かうための「動機付け」である．幼児，そして仲間，

また自分自身に対する積極的関心を持ち続けることは時に難しい．とりわけ，まだ明確には支援者としての「生き方」を選択していない段階で，授業での学びに向かう動機づけが得られなければ，授業のなかで他者や自分自身に対する積極的関心を持ち続けることは困難であろう．

授業で得られる学びへの動機づけについては，本研究が明らかにした学習過程を促す要素のなかに，以下の二つが参考になるだろう．まず一つ目が，実習の前段階で獲得していた子ども達に対するイメージであり，二つ目が社会的な問題意識を持つことである．この二つを順にあげて，本研究のまとめとしたい．

①「待ちに待った実習」という表現で語られているように，筆者は教育実習の始まりを子ども達へのイメージを心に育てながら心待ちにしていた．「保育内容指導法（人間関係）」においては，こうした子どものイメージを育てることのできる具体的な事例に，映像やゲスト・スピーカーの語りなどを通して触れることが重要となろう．そして事例としては，幼児の発達段階に応じた課題や，幼稚園や保育園での集団生活における課題，そして家庭における家族関係の課題など，多様な視点から幼児の人間関係をとらえたものが求められる．そして，こうした学びを講義形式ではなく，仲間達と何らかの課題に取り組むなかで学んでいくことも必要だ．それにより，仲間や自分への理解を深めていくことも可能となる．授業内にとどまらず，学生生活全体に広がりを持つ，仲間との相互理解と自分に対する自己理解を深めていこうとする学習過程こそ，学びの「動機づけ」になると考える．

②子どもを支援しようとする時，その子どもと家族，そしてその背後にある社会を見つめる視点，とりわけ子どもの育ちを阻害する社会問題への視点は重要である．社会に対する問題意識は，学生が日々の生活を営む中で培うべきものだが，授業において仲間と共に問題意識を共有するプログラムを用意することが必要となろう．子どもの貧困や，児童虐待など，社会的な問題を抱える子どもと対峙した時，果たして自分に何ができるのか．こうした問いを自分に問うことは，学びに向かう動機づけになると考える．

＜注記＞

1）ブーバー（Buber,Marutin,1878–1965）オーストラリア出身のユダヤ人哲学者で，代表的な著書が『我と汝』である．「対話の思想家」とも称され，すべての真実なる生とは，まさに出会いであると説いた．

2）ロジャーズ（Rogers, Carl Ransom, 1902–1987）アメリカの心理学者で，クライエント中心療法というカウンセリング理論の創始者．アメリカを中心に活躍したが，世界各国にカウンセリングを普及し，日本もその強い影響を受けた国の一つである．

3）伊東博編：小学校の学習カウンセリング．

初版，明治図書出版，東京（1974）.

4）今堀美樹：「出会い」を中心とした学習過程についての考察―グループ・スーパービジョンへの取り組みを通して．大阪体育大学健康福祉学部研究紀要，3：13–26，2006.

5）伊東博編：前掲書，1頁.

6）中野良顕：学習を援助する授業の諸原理.（伊東博編）小学校の学習カウンセリング,37–58，明治図書出版，東京（1974）.